

佐保光俊 令和8年6月度特別作品

神話の国出雲

佐保 光俊

神話の国出雲と言われる。一般によく知られている出雲に関わる神話といえば、天皇家の祖先神アマテラスの弟神スサノヲが人を苦しめる大蛇を退治する「ヤマタノオロチ退治」と出雲の神オオクニヌシが傷ついた兔を救う「因幡の白兔」である。詳しい人になると、オオクニヌシが天皇家の祖先に国土を譲り渡す「因幡神話」を存してあろう。これら三つの神話は『古事記』（七十二年）や『日本書紀』（七十二の年）以下、『記紀』に出てくるものだが、実はもう一つ出雲神話を載せたものに『出雲国風土記』（七三三年）（以下『風土記』）がある。風土記における代表的な神話は、出雲の神ヤツカミズオミツノによる島根半島形成を題材にした「因引き神話」と呼ばれるものである。なお、風土記にはオオクニヌシという名の神は登場せず、これに相当する神として、国土開闢を行ったオオナムチという神が出てくる。また、記紀においては荒ぶる神として描かれるスサノヲは、風土記においては豊作を祈願して踊る神として登場するという違いもある。そして、記紀の先の三つの神話のうちの「ヤマタノオロチ退治」と「因幡の白兔」に類する話は、風土記には出てこないという違いもある。

ここで、記紀と風土記の出雲神話の違いの背景を見てみよう。記紀はヤマト王権（中央貴族）がまとめたものであり、風土記は出雲国造（地方の首長）がまとめたものである。そのため、記紀の神話にはヤマト王権の国家観が反映し、風土記の神話には出雲の土地に根付き、息づいた神話を取り上げられているという根本的な違いが生じている。ただし、一つ注意しておくべきことがある。それは『日本書紀』編纂の中心メンバーとなる忌部宿禰子首（いんべのすくねおびと）が七〇八年に初代出雲国司として着任し、数年間滞在したことである。この間『日本書紀』と風土記の記述に関して、出雲国造との間で様々な調整がなされたであろうことは想像に難くない。つまり、本来、出雲土着の神話のみを記載するはずの風土記の中に、異質な天皇家への「因幡神話」が組み込まれたのである。

こうした背景を踏まえながら、私は風土記に記載された場所や、古墳などを訪ねている。時代区分としては、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡訪問であり、支配体制から見ると、出雲の人々が土着の勢力によって統率・統制され、やがてヤマト勢力に委食され、ついには律令体制に組み込まれていくという体制変化の軌跡をたどる旅である。その中で、今回の特別作品は、スサノヲとオオナムチ（記紀ではオオクニヌシ）に特にゆかりの深い古代出雲国飯石郡と大原郡を歩いた時の句でまとめたものである。本来、出雲国に限らず、どの国においても人々は土着の神を崇めていたはずであり、神話の国は出雲だけではない。神話の国出雲という先入観を捨てて、あらためて出雲土着の神を私なりに観念するために『出雲国風土記』を手に、これから出雲の旅を続けよう思っている。

出雲に入り最初の蝶の色は白

戦ふ神踊る神あり花万朶

青葉山巡らせ神は住むといふ

花冷の一步一步の御室山

須佐社 二句

女の子ふたり来てゐる春祭

大きな田に小さき田に蛸蛸生まれけり

飯石郡家

御衣黄のいまを盛りと郡家跡

船岡山

船もまた山に成るてふ飛花落花

御門

八重桜より暮れてゆく三刀屋かな

松本古墳群

桜葉降るや古墳はあのあたり

三瓶山

田水張り佐比賣山までまだ少し

畠境の山見えてゐる牡丹かな

どの道で蘇我は入りしか連翹よ

《作品鑑賞》

高尾ひとみ

佐保先生の第四句集『吉備』に続く「出雲」。双方とも、大和と九州・朝鮮半島を結ぶ途中にあり、古代、地方の有力な勢力として栄えた。出雲国風土記があるためか、出雲地方に住む人々の心ばえによるものか、現代においても、出雲は、吉備や近江よりも古代に近いように感じる。古代を胸に感じながら、作品を味わった。

戦ふ神踊る神あり花万朵

記紀では戦う神、風土記では踊る神。どちらの話が本当か今は知る由もないが、あふれるように咲く桜を、古代の人も現代の私と同じように胸いっぱい思いで眺めたに違いない。

花冷の一步一步の御室山

出雲国風土記に、「神須佐乃乎命（かんすさのおのみこと）、御室（みむろ）《神の御座所》を造らせなきて宿った所である。だから、御室という」とある。スサノオを身近に感じながら、桜の咲く山を一步一步登ってゆく。

大さ田に小さき田に蛸蚪生まれけり

「神須佐乃乎命（かんすさのおのみこと）が『この国は小さい国だがよい国なり。我名を岩木にはつけない』と言って自分の御堂を鎮め置き、大須佐田（おおすさだ）、小須佐田（おすすさだ）を定めた。だから須佐という」とある。この句は、まさに出雲風土記が今につながることを感じさせてくれる。スサノオも須佐の田のオタマジャクシを眺めたに違いない。

船もまた山に成るてふ飛花落花

「阿波柁間委奈佐比古命（あわきへわなさひこのみこと）が曳いてきて据えられた船が、この山である。だから、船岡という。」とある。船のような大きな形をした山なのだ。今は、満開の桜が風に舞い散っている。

《作品鑑賞》

亜矢

「神話の国出雲」は、作者がひたすら歩き、それぞれの場所を身を置いた作品である。出雲神話とは何か。情報があふれる現代において、自分の五感をもって考え、納得しようとする作者の姿勢は、重要な意味を持つことだと思う。

出雲に入り最初の蝶の色は白

「白」が効いている。これから始まる出雲の旅を、作者はまっさらな気持ちで臨んでいる。掲句の蝶が作者を象徴しているかのようだ。

女の子ふたり来てゐる春祭

須佐神社は、四月に大祭があるとのこと。男性が多い祭の中、女の子がふたり。地元住民だろうか。淡々と詠まれているからこそ、地域に根差した厳かな祭が想像できる。

桜葉降るや古墳はあのあたり

松本古墳は、前方後方墳で、県内最古の一つとされている。「あのあたり」ということは、はっきり形が見えないということか。それでも作者は、遠い昔を思いながらしばし見ている。当時はなかったであろう桜を詠むことで、その場所でのゆっくりとした時間の流れを感じる。

《作品鑑賞》

井藤希

八世紀に全国各地で編纂された風土記の中で完本が現在まで伝わっているのはこの「出雲国風土記」だけであると言う。風土記に記された山々や社寺、神話などを今の出雲に辿り、古代の気配に思いを至らせる旅はさぞ心躍るものであったに違いない。花の季節に古代から今に至る出雲が輝いている。

戦ふ神踊る神あり花万朵

花冷の一步一步の御室山

佐世の木の実を頭に刺して踊ったスサノオ、そのスサノオが御室を作らせて籠ったところから名がついた御室山。花の頃この句のスサノオは風土記のままにまことに素朴で種やかである。

船もまた山に成るてふ飛花落花

風土記では阿波のワナサヒコが引いてきた船がこの山（船岡山）になったという。盛んに花の散る中で、作者は出雲国と遠く四国の阿波国との古代の交流にどのような思いを巡らせたのだろうか。

田水張り佐比賣山までまだ少し

スケールの大きな「国引き神話」に出てくる山の一つが佐比賣山（三瓶山）である。活火山でもあるこの山へ行く途中の代田の静穏な風景に心が落ち着く。「まだ少し」に絶妙な距離感がある。

《作品鑑賞》

曉子

残念なことに、先生から教えて頂いた事以外には、記紀や風土記に関する知識は殆どありません。遙か昔の出雲はヤマト政権が無視出来ぬ程の力を持ちながらも、次第に体制に組み込まれて行きます。そんな中で信仰や神話、伝統などは生き続け、その長い時間の経過や寂寞が出雲に対するロマンとなり我々の心を惹き付けているのでしよう。

先生は風土記への深い思いの中に出雲を旅なさいました。

戦ふ神踊る神あり花万朶

超能力などとはなくても戦い、楽しみ、人生を謳歌する人間臭い神様が浮かびます。花万朶の季語が却って静寂な山深さを思わせます。

御衣黄のいまを盛りと郡家跡

御衣黄という美しい季語で郡家が活発に機能していた頃に一瞬引き戻されました。

大さ田に小さき田に蛸蚪生まれけり

雲州は峽の多い地と聞きます。棚田でしょうか、動物たちも又営々と命を繋いできたのです。過疎化の波は出雲にも押し寄せているに違いありません。そんな今、土着の神様たちは何を思われているのでしょうか。

《作品鑑賞》

知佳子

「古代の無名の人々に思いをはせ、神話に正面から向き合い作句をされる佐保先生の俳句を鑑賞させていただき、学びの多い時間でした。」

出雲に入り最初の蝶の色は白

何事にもまっさらな気持ちで対峙する、きっぱりとした覚悟が、蝶の色は白という体言止めから伝わります。

戦ふ神踊る神あり花万朶

古代の人々にとって神は今よりもっと身近な存在だったのでしょうか。花万朶という季語が、顔も知らない人々と私を繋いでくれるようです。

御衣黄のいまを盛りと群家跡

御衣黄というゆかしい花の姿と、群家の盛衰に心打たれます。

船もまた山に成るてふ飛花落花

船が山に成るという、古代の人の伸びやかな感受性を思いながら、時を超えて昔も今も変わらない桜の散る様が目に見えます。

田水張り佐比賣山までまだ少し

田水に空が映る道。佐比賣山までの道のりに、神話の時代を楽しみながら大切な時を過ごす情景が伝わります。